千里ニュータウンの市民活動の動きとコミュニティ再生の展開

Movement of Community Revitalization by Civic Activities in Senri New Town

千里ニュータウン研究・情報センター共同代表
太田　博一

1．はじめに

千里ニュータウンは、高度経済成長期の大阪都市圏への労働力人口の集中による住宅不足への対応を目的として、大阪北部の千里丘陵に建設された（1962年まちびらき）。当初の住民の多くは地方出身の新婚世帯や子育て世帯で、身近に親や親族はおらず、子育ては近所の母親同士の助け合いに頼ることが多く、コミュニティのつながりは密であった。集合住宅は住宅全体の85％を占め、ほとんどが中層の階段室型であったため、階段室を共用する8戸または10戸がコミュニティの単位となって、子どもを介した付き合いが育まれていった。

このような近隣のつながりは、コミュニティ形成を重視した近隣住区論や、住民交流のための中庭を持つ囲み型住棟配置の団地計画（歩車分離のラドバーン方式）といった計画上の特徴も合わさって形づくられていった。

しかし、まちびらきから約40年を経た2000年頃には、集合住宅の建替え計画が本格的に動きだし、住民は居住環境やコミュニティの変化について考え、備えなければならない状況になり、このことが新たな市民活動を生み出すことになった。さらに2010年頃には、建替えが完了した団地が増え、新住民の増加などもあって、コミュニティや市民活動は新たな課題に向き合うことになった。

本稿では、2000年以降の千里ニュータウンの市民活動の流れを振り返るとともに、今後のコミュニティ活性化につながるようなコミュニティや市民活動の動きを探る。

2．2000年から2010年頃の新たな住民活動の展開

2000年前後の千里ニュータウンは、少子高齢化や集合住宅の建替えの本格化、リタイア男性の地域への参加といった社会状況の変化の時期であった。それまでの約40年の間に育まれてきたコミュニティの形や地域運営などにも影響するような課題が集中的に顕在化した。

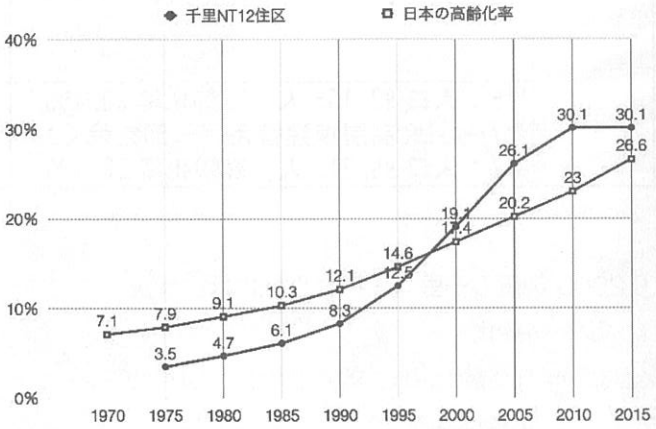

図１　千里ニュータウンと全国の高齢化の推移
（図１～３は千里ニュータウン研究・情報センター田中康裕作成）

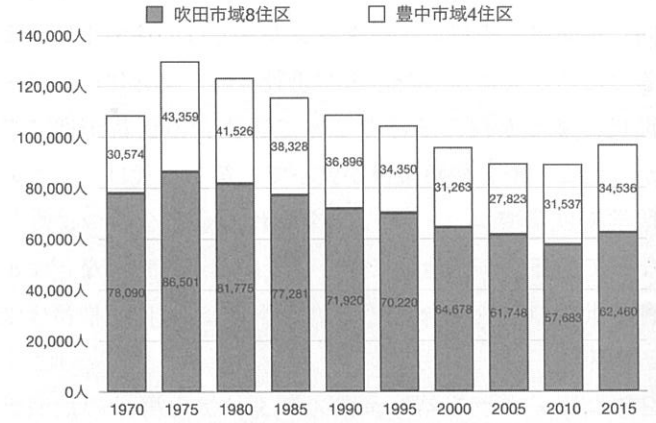

図２　千里ニュータウンの人口の推移

1）千里ニュータウン研究・情報センターウェブサイト　https://senrinewtown.xsrv.jp/

表1　2000年頃以降の千里ニュータウンの状況

西　暦	社会状況	公共施設や市民組織・活動等の開始年 ＊（吹）：吹田市、（豊）：豊中市、（吹・豊）：吹田豊中両市
1995年	97：人口が10万人を下回る（ピークは1975年の129,860人）	
2000年	**00：人口95,941人、高齢化率19.1%** 90年代～08頃：社宅建替え 00～09頃：府公社公団分譲団地建替え 02：千里ニュータウンまちびらき40年	00：新千里南町3丁目自治会発意「景観形成協定」（豊） 00：佐竹台ラウンドテーブル（吹） 01：コミュニティカフェ「ひがしまち街角広場」（豊） 01：東丘ダディーズクラブ（豊） 02：千里ニュータウンの再生を考える市民100人委員会（吹） 02：千里グッズの会（現千里ﾆｭｰﾀｳﾝ研究・情報ｾﾝﾀｰ）（豊） 03：千里竹の会（吹・豊） 03：千里市民フォーラム（吹・豊）
	05：人口89,571人、高齢化率26.1% 05～：府公社賃貸団地建替え（13完了） 08～：府営団地建替え（30完了予定）	06：千里ニュータウン展（吹・豊） 07：笹部書店カフェコーナー設置（豊） 07：千里ニュータウン再生指針（吹・豊） 08：豊中市立千里文化センター「コラボ」（豊） 09：コミュニティカフェ「佐竹台サロン」（吹）
2010年	**10：人口89,220人、高齢化率30.1%** 12：千里ニュータウンまちびらき50年	10：千里文化センター市民実行委員会（豊） 10：佐竹台地域交流室「おひさまルーム」（吹） 11：コミュニティカフェ「さたけん家」（吹） 12：吹田市立「千里ニュータウンプラザ」（吹） 12：新千里東町地域自治協議会（豊） 12：東町シニアクラブ連絡会（豊） 12：吹田市立市民公益活動センター「ラコルタ」（吹） 13：新千里北町地域自治協議会（豊） 14：新千里北町「畑のある交流サロン」（豊）
	15：人口97,156人、高齢化率30.4% 17～：UR高層棟建替え（一部を除く） **17：人口99,319人、高齢化率30.1%**	18：千里ニュータウン再生指針2018（吹・豊）

①2000年頃の千里ニュータウンの社会状況

1）少子高齢化

2000年の高齢化率の全国平均は17.4%であったが、千里ニュータウンは19.1%と全国平均を抜き、以降、2010年まで高齢化率の上昇が続くことになる（図1）。同時に少子化も進行していた。これは全国的な少子化傾向に加えて、千里ニュータウンならではの住宅事情によるところが大きかった。当初建設された集合住宅に第一世代の多くが住み続けたことで居住者の更新が進まなかったことや、住戸規模が狭小で、第二世代は大学への進学や就職でニュータウンを離れ、家庭を持つようになっても多くが他地域に住むようになったことなどが子育て世代の減少と少子化につながった（人口の推移は図2参照）。

2）ニュータウン第一世代のリタイアと男性の地域デビュー

千里ニュータウンは、1960年代初めから70年代にかけて20歳代から30歳代の若い世代が10年ほどの短期間に集中して入居したため、2000年頃になると定年退職が始まり、男性の「地域デビュー」が増えだした。それ以前は、子育てつながりの第一世代の女性を中心に自治会運営や市民活動が行われていたが、2000年頃からはリタイア男性の地域運営や市民活動への参加が増加した。

3）集合住宅の建替えの本格化と身の回りの環境への関心の高まり

この時期は、集合住宅の建替え計画が本格的化した時期でもあった。住区全体の居住環境や景観、コミュニティなどに影響するような団地ブロックでの建替えが多くの場所で同時に進行する状況になった。このような大規模な建替えは、府公社・公団が供給した分譲団地に始まり、賃貸の府公社団地、大阪府営団地と続いていく。建替えラッシュとも言える状況は、地域に参加しだした男性たちも含めて、市民の多くが身の回りの環境やコミュニティのあり方に関心を持つきっかけとなった。このよう

な関心の根底には、千里ニュータウンが、第二世代やその子どもたちが盆正月に帰省する「故郷」になっていたということもある。第一世代が、「子どもや孫の故郷としてふさわしい千里ニュータウンは？」という思いを持つようになったと考えられる。2001年の新千里東町の地域新聞「ひがしおか」創刊号に掲載された地域づくりのテーマは、「住んでみたい、住んでよかった、これからも住み続けたい東町」であった。

4）2002年の千里ニュータウンまちびらき40年

千里ニュータウンではそれまで、まちびらきの周年記念や子どもたちのための催しなどを通じた吹田と豊中の市民の交流はあったが、日常的な交流は活発ではなかった。しかし、集合住宅の建替えによる環境の変化をいかに受け止め対応するかは、吹田・豊中両市民の共通の関心事となり、2002年のまちびらき40年の催しとして開催された「千里ニュータウンまちづくりフォーラム」での交流を機に、両市の住民活動グループの交流が盛んになっていった。

②2000年から2010年頃の市民活動の動き

1）エポックを画した「佐竹台ラウンドテーブル」と「ひがしまち街角広場」

2000年以降は、既存の市民活動のメンバーにリタイア男性や千里ニュータウンの環境改変に関心を持つ住民などが加わって、居住環境やコミュニティのあり方を考え、活動するいくつかの市民団体が生まれた。その中の代表的な団体が、吹田市佐竹台の「佐竹台ラウンドテーブル」と豊中市新千里東町の「ひがしまち街角広場」である。

＜佐竹台ラウンドテーブル＞

佐竹台では1990年代の後半に、府公社賃貸団地（千里丘陵B団地・C団地ほか）の建替え計画が始まった。しかし、団地周辺の自治会などとの調整がつかず、建替えの実施は先延ばしになっていた。2000年になって、建替えが先行するB団地の新任の自治会長のリーダーシップで、団地やその隣接地の住民だけではなく、佐竹台住区の住民誰もが府公社団地の建替え計画に意見を述べることができる「佐竹台ラウンドテーブル」が設置され、建替えのあり方について議論がなされた。その結果、地域住民の要望や提案が取り入れられて、団地外の住民も自由に通り抜けることのできる団地歩行者路や歩行者路沿いの休憩スペースの設置、団地集会所を活用した誰もが利用できるコミュニティカフェ「佐竹台サロン」の設置など、地域に開いた団地（OPH佐竹台）の建設が決定した（写真1）。以降、佐竹台では、府営団地の建替えや近隣センターでの住民運営のコミュニティカフェの設置などについてもラウンドテーブルで議論され、実践されるようになった。「佐竹台ラウンドテーブル」の活動は、「新しい地縁づくり」の場として位置付けることができる。

＜ひがしまち街角広場＞

新千里東町は、2000年に国の「歩いて暮らせる街づくり」の構想策定事業の対象地区に採択された。住民はまち歩きやワークショップを行って、「多世代居住のための多様な住宅供給を！」、「学校をコミュニティの場に！」、「近隣センターを生活サービス・交流拠点に！」といった提案をまとめた。提案の実践の一つとして近隣センターの空き店舗を活用した地域ボランティア（主に第一世代の女性）運営のコミュニティカフェ「ひがしまち街角広場」がオープンした。この時期は、高齢化や高齢者の独居が増加する時期であったので、「ひがしまち

写真1　OPH佐竹台（佐竹台ラウンドテーブルの成果）

写真2　ひがしまち街角広場

街角広場」は、誰もがふらりと立ち寄ることのできる「まちの居場所」となり、自然な安否確認の場ともなった（写真2）。このカフェからは、竹林整備の市民団体「千里竹の会」や千里の魅力や価値を発信する「千里グッズの会（現千里ニュータウン研究・情報センター）」などが生まれ、また、住区の団体の会合の場ともなり、自治会や近所付き合いを超えた「新しい地縁」の拠点となった。

2）エポックを画した2つの活動の波及

「佐竹台ラウンドテーブル」は、その後の佐竹台の府営住宅の建替えにあたっても、子育て世代誘引のための子育て支援施設の設置を府や市に提案し、府営団地の余剰地（民間への売却地）に建設された分譲マンションの1住戸分のスペース（マンション事業者が吹田市に寄贈）に子育てサークルの活動のための「おひさまルーム」が2010年に誕生した。また、佐竹台近隣センターの書店をコミュニティカフェにしたいという住民の提案を支援し、2011年に後述の「さたけん家（ち）」が開設されるなど、ラウンドテーブルは現在も、地域づくりの協議の場としての役割を担っている。

一方、「ひがしまち街角広場」は、前述のように地域団体などの会合の場としてコミュニティ交流に貢献するとともに、小学生が下校時に水を飲みに立ち寄る場所として開放するなど、世代を超えた交流の場として定着している。さらに、カフェ運営の手法は、他の近隣センターの店舗や団地集会所を活用したコミュニティカフェの開設のモデルとなった。

「佐竹台ラウンドテーブル」や「ひがしまち街角広場」の活動は、2002年の千里ニュータウン40周年記念の「千里ニュータウンまちづくりフォーラム」の催しによって、広くニュータウン内に知られるようになり、上記2つの団体のリーダーを中心として「千里市民フォーラム」が設立された。市域を超えた情報交流を目的としたこの団体は、千里ニュータウンの居住環境やコミュニティに関わる課題を共有し、課題解決を探る場ともなっていった。

このように、2000年から2010年頃にかけては、それまでの自治会組織や吹田・豊中2市の枠組みを超えたコミュニティ活動の連携や情報交換が活発に行われる時期であった。

3．2010年頃以降のコミュニティの変化と市民活動の多様化

2010年を境にして、千里ニュータウンの人口や世帯数は増加に転じ、上昇を続けていた高齢化率は約30％で推移することになる（ただし、後期高齢者の割合は増加）。これは、集合住宅の建替えの進展に伴い、転入者が増加したことによるものである。転入者の中心は子育て世代であり、子どもの増加にもつながった。集合住宅のみで住宅が構成されている新千里東町では、集合住宅の建替えによる転入者増は人口構成の変化に明確に表れている。2000年の人口構成の山は二つに分かれており、60～64歳が第一のピークとなり30～34歳が第二のピークを形づくっていた。一方、2015年の人口構成では山は三つになり、40～44歳が第一のピーク、70～74歳が第二のピークとなり、14歳以下の子どもの比率も増加している（図3）。このような人口構成の変化は、2010年以降のコミュニティや市民活動にも影響を与えている。

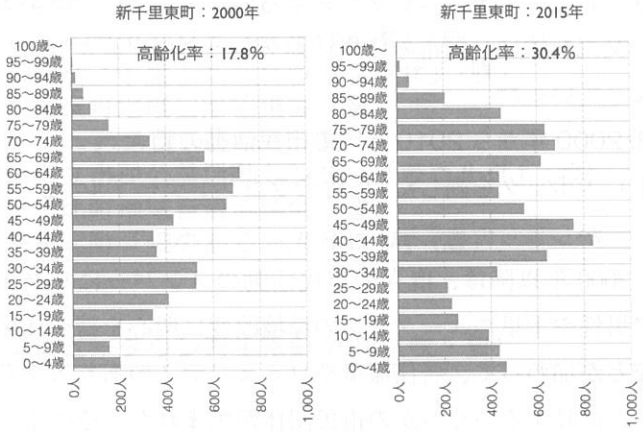

図3　新千里東町の人口構成・2000年（左）と2015年（右）

①2010年頃以降の千里ニュータウンの社会状況

1）集合住宅地の建替え後のコミュニティの状況

2010年前後には、分譲団地のマンションへの建替えがピークを越え、府公社賃貸団地や府営団地が中心となって建替えが進み、次第に完成していく。中層（4, 5階建て）の階段室型は高層の廊下型へと建替えられ、長年続いてきた階段室単位のコミュニティは分解し、コミュニティのまとまりや隣近所での共助が生まれにくい廊下型の居住環境となった。特に府営団地は、新たな入居者の住宅枠がほとんどないために高齢化は一層進み、高齢者の独居の増加や自治会運営の担い手不足などは一層深刻になっている。

一方、分譲マンションについては、旧分譲団地の建替えの場合は、戻り入居の住民が中心になってマンション内に新旧住民交流の場（趣味のサークル活動やコンサー

ト、夏休みラジオ体操、クリスマス会など）が設けられることが多いが、府営団地や府公社賃貸団地の余剰地に建てられた分譲マンションの場合は、すべて新たな入居者であるため、住民交流の場が生まれにくい。また、分譲マンションの多くはセキュリティを優先してゲーテッド・コミュニティが形づくられており、地域交流の面ではマイナスになっている。

2）戸建住宅地のコミュニティの状況

千里ニュータウンの戸建住宅の敷地は戸当たり100坪前後と規模が大きいが、自治会の申し合わせ（任意の協定）や建築協定、地区計画などで一定規模以下の敷地分割を禁じており、敷地分割はほぼ不可能である（一部にルールが定められていない地区もある）。さらに、第二世代はニュータウン外に居を定めている場合が多く空き家が増えているが、土地の価格が高額であるために、売りに出された土地の購入層が限られる。このような状況により、戸建住宅地では現在も少子高齢化が進行しており、地域運営が一層難しくなっている。

3）コミュニティや市民活動の担い手の変化

2000年頃はリタイア男性の地域デビューの始まりの時期であったが、第一世代の女性の地域参加・運営は続いていたので、第一世代が男女ともに住民活動の主力となって「佐竹台ラウンドテーブル」や「ひがしまち街角広場」、「千里市民フォーラム」などの市民団体が生まれた。しかし、2010年頃以降は、リタイア男性の地域参加が増加し、地域運営の場では男性が主導する傾向が強くなる一方、つぎに紹介する千里文化センター市民実行委員会のようなテーマ型の団体では、女性や子育て世代が運営に力を発揮するようになる。

②2010年頃以降の市民活動の動き（豊中市域を中心として）

1）市民が市民交流の場の企画・運営を担う「千里文化センター市民実行委員会」

豊中市域の千里中央地区では、豊中市の複合施設が建替えられ、千里文化センター「コラボ」として2008年にオープンした。市の出張所や公民館、図書館、保健センター、老人福祉センター（現在は介護予防センター）で構成されるこの施設の運営に市民の意見を反映させることを目的として、公募市民とセンター内の施設長で構成される「千里文化センター市民運営会議」が発足した。運営会議は、市民が施設内での交流の場づくりを担う「千里文化センター実行委員会」の設置を提案し、2010年に公募市民による委員会が発足した。15名ほどのボランティア市民委員（5年任期）は、施設内の多目的スペースなどを活用してカフェの運営や市民向けのセミナー、懇談会、コンサートなどを企画・運営し、「テーマ型」の市民交流の推進役となっている。また、委員を支援するサポーター制を設けることで、ボランティア育成の役割も果たしている。なお、2018年度の委員は14名で、男性9名（うちリタイア男性7名）、女性5名（うち子育て世代2名）である。

2）千里ニュータウン第二世代が運営する新しい形のコミュニティカフェ「さたけん家」

吹田市域では、「佐竹台ラウンドテーブル」の支援により、佐竹台近隣センターの書店を改修したコミュニティカフェ「さたけん家」が2011年にオープンした（写真3）。曜日別担当の主婦スタッフが手作りのランチを出し、材料費を差し引いた売り上げはスタッフに還元されるという、コミュニティビジネスの考え方が導入されている。2階の元住居を改修した集会スペースでは、ヨガや健康教室、高校生による小学生向けの寺子屋などが開かれている。「さたけん家」では、「新しい地縁」をベースにして「テーマ型の縁」づくりも担うような、新たな形のコミュニティ交流の場が運営されている。

3）豊中市の地域自治推進条例の施行と新千里東町・北町の「地域自治協議会」の発足

豊中市は、自治会を束ねる自治会連絡協議会をはじめ、福祉や防犯などのテーマ別に分かれていた地域団体を小学校区単位で一つにまとめて、総合的な地域運営を推進するために、2012年に「地域自治推進条例」を施行した。より多くの住民や地域団体が地域運営に参加できる場を設けることで、住民同士の支え合いや地域活性化を進めようとするものである。2012年には新千里東町で、2014年には新千里北町で地域自治協議会が設立された。集合住宅の建替えによる子育て世代の転入が増える中で、新旧住民の連携や若い世代の地域運営への参画を促進する狙いもあった。

4）新たな住民活動や協働の場と担い手づくりの動き

豊中市域の新千里東町や新千里北町では、コミュニティとのつながりが薄くなりつつある高齢者や、つながりのきっかけを探している新住民（特に子育て世代）をコミュニティ交流の場に誘うための実践が行われている。

＜地域の高齢者同士の支え合いの場「東町シニアクラブ

連絡会」（新千里東町）＞

新千里東町では、団地建替えによって、コミュニティとのつながりが薄くなりつつある高齢者の状況を改善しようと、団地やマンションのシニアクラブを復活し、増やしていこうという活動が2012年に高齢者自身の発案で始まった。2012年に2団体であったシニアクラブは、現在8団体となり、メンバーリストを作成して安否確認にも役立てている。

＜畑作業を介した地域交流の場「畑のある交流サロン」（新千里北町）＞

新千里北町の北丘小学校では、児童数の減少で使われなくなった校庭の中庭を利用して、2015年に住民参加による共同菜園の整備と野菜づくりが始まった。菜園横の空き教室には、交流の場として「畑のある交流サロン」が設けられた（写真4）。この活動は、地域自治協議会の子育て部会の事業として位置付けられ、「子育て支援」に加えて「世代間交流」をテーマに掲げている。菜園では、高齢者や子育て世代、子どもたちが野菜づくりの共同作業を行い、交流サロンは、子育て世代が地域の催しの準備を手伝う作業スペースとしても使われており、気軽な作業の手伝いが、輪番制のような強制的ではない「まちの担い手」育成の場になっている。

＜「あいあい食堂」と「ひがしまち街角広場」の連携（新千里東町）＞

「ひがしまち街角広場」のある新千里東町近隣センターに、2015年に空き店舗を活用した訪問介護ステーション（2階）と軽食を提供する「あいあい食堂」（1階）が開設された（写真5）。運営はともに大阪府社会福祉事業団である。ランチの時間以外は高齢者向けのミニセミナーや健康体操、落語会などの催しが開かれ、高齢者の集いの場になっている。あいあい食堂は催しの際に街角広場に飲み物を注文し、街角広場は利用者に催しの告知をするといったように、相互に支援し合う関係にある。このような住民と事業者との連携は、今後、近隣センターに求められる生活サービスの地域参加による運営の一つの方向性を示している。

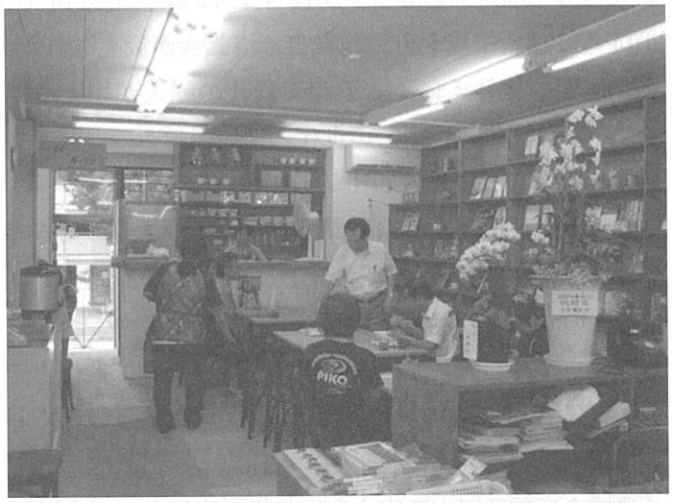

写真3　さたけん家

写真4　畑のある交流サロンの前庭の共同菜園

写真5　あいあい食堂（大阪府社会福祉事業団撮影）

4．まとめ

2000年以降の千里ニュータウンの団地再生は、団地の建物などの更新や敷地利用の経済性（高層化、高密化）に比重が置かれ、コミュニティのまとまりや段階構成といった千里ニュータウンの計画理念や住民が醸成してきたコミュニティへの視点に欠けたものであった。これに対して、2000年頃からの市民活動は、団地再生やニュータウン再生に向けた提案を行い、あるいは、ニュータウン計画に欠けていた「ふらっと立ち寄る場所」を住民の力で生み出すといった市民の暮らしの視点からのコミュ

ニティ再生に貢献してきた。

2012年には、千里ニュータウンまちびらき50年を迎えたが、この時期に、それまでの建替えによる居住環境やコミュティの変化を市民、事業者、行政がともに振り返り、検証し、その後の建替えに活かしていくべきであったが、残念ながらそのような動きはなかった。これは、建替え事業の成立という経済性優先の規定条件が強くあり、一方、市民活動の状況は、課題の多様化や参加メンバーの立場の多様化によって、居住環境やコミュニティに対する見方も多様になり、千里ニュータウンのあり方を議論するよりは、住民交流に重点を置いたテーマ型（集客型）へと活動の重点が移っていったことによると考えられる。

とは言え、2010年以降には、佐竹台近隣センターの「さたけん家」や新千里北町の北丘小学校の「畑のある交流サロン」の活動、新千里東町近隣センターの「ひがしまち街角広場」と「あいあい食堂」の連携といった、暮らしに密着した活動の中に、千里ニュータウンの計画的特性を活かした動きが見られるようになる。小学校や近隣センターに生じた「空き」が、千里ニュータウンの価値を見直し、再活用する活動につながっており、この動きは、つぎのような意味を持つと考える。

①住区コミュニティの核として計画された小学校や近隣センターの再評価と活用

②集合住宅、戸建住宅といった居住場所の違いや、世代、居住歴を超えた共同作業や連携によるコミュニティの歴史や価値の伝達

③近隣センターに求められる生活サービスを支える手法としての民・業連携やコミュニティビジネスのモデル的実践

千里ニュータウンの暮らしの中でのこのような価値の再発見と活用は、ハードに重点を置いた団地再生やニュータウン再生の方向性とは異なり、住民の暮らしの視点からのコミュニティ再生と言えるもので、ささやかな動きではあるが、今後の千里ニュータウンのコミュニティや市民活動の進展、活性化につながっていくものと

写真７　北町車止めペイント祭り（新千里北町）
＊キリン型車止めのペンキ塗り替えの様子

図４　新千里北町車止めマップ
（千里ニュータウン研究・情報センター武部俊寛作成）
＊新千里北町住区のみに動物型や幾何学型のユニークな車止めが多数設置されていることが発見された。

写真６　八中の中庭を蘇らせよう！プロジェクト（豊中市立第八中学校）

期待される。

最後に、筆者が所属している「千里ニュータウン研究・情報センター」を紹介させていただく。当センターは、千里ニュータウンの暮らしの歴史や価値を収集・蓄積してウェブサイトなどで発信するとともに、千里ニュータウンの紹介冊子や絵葉書の発行、定期的な千里まち歩きツアーの実施、住民の思い出の調査、新千里北町住区のユニークな車止めなどの設置物からの計画の変化の読み取り（図4）、設置物の住民参加によるリノベーション（塗り替え）のコーディネートなど（写真6、7）、千里ニュータウンの歴史や価値を見直し、活かす活動を行っている（「千里グッズの会」として2014年11月29日に都市住宅学会業績賞受賞）。

（参考文献）

江藤道子　鈴木毅　松原茂樹　木多道宏（2013）「新千里東町における建替えに伴うマンションコミュニティ形成に関する研究」『日本建築学会近畿支部研究報告集（計画系）』Vol.53　pp.285-288

鈴木毅（2017）「千里からニュータウンを考える～「当事者の時代」における計画された町の成熟に向けて～」『季刊民族学』161号　pp.50-58

太田博一監修　太田博一・田中康裕・鈴木毅編（2012）『千里ニュータウンウォーク・ガイド～「千里ニュータウン計画」の思想を巡る～』千里グッズの会／千里ニュータウン研究・情報センター

鈴木毅　太田博一　田中康裕　松原茂樹（2013）「千里ニュータウンのための地域絵葉書の開発」『日本建築学会技術報告集』第19巻　第41号　pp.261-264

直田春夫（2005）「千里ニュ～タウンのまちづくり活動とソ～シャル・キャピタル」『都市住宅学』No.49　pp.15-21

鈴木毅（2009）「千里の再構築に向けて～誰が主となるのか～」『CEL』大阪ガスエネルギー・文化研究所　Vol.88　pp34-37

佐藤健正（2000）「ニュータウンの40年とその今後」『都市住宅学』No.30　pp.34-42

田中康裕（2001）「ひがしまち街角広場－ニュータウンの空き店舗を活用した地域の「ひろば」－」『建築と社会』Vol.92　No.1069　pp.24-25

日本建築学会（2010）「まちの居場所　まちの居場所を見つける／つくる」pp.23-30、142-151

武部俊寛（2017）「新千里北町の車止めに関する研究　～千里ニュータウンのミクロなデザインから生まれた地域資源～」平成28年度近畿大学大学院修士論文